

長万部地域社会研究部門長としての 巻頭言

東京理科大学 基礎工学部 生物工学科 教授 ともおか やすひろ
友岡 康弘

「長万部地域社会研究部門」は、平成23年10月から活動を始め、平成28年9月に終了しました。部門員は基礎工学部長万部教養の教員を中心に、基礎工学部、理学部第一部や理工学部の教員や外部からの研究者も参加して、約20名で活動しました。そして他の部門とは異なり、長万部町の行政関係者、長万部

漁協や町民の方々にも参加していただき、東京理科大学（基礎工学部長万部教養）と長万部町の共存を目指し、積極的に長万部の“町づくり”に参画しようとなりました。その効果があったか、平成27年10月に「長万部地方創生サミット」が開催され、石破茂（地方創生担当大臣、当時）も来町・講演されました。

さらに平成28年には基礎工学部30周年行事とともに「長万部フォーラム」も開催され、その様子は本「理大科学フォーラム」誌でも紹介されました。

部門としての活動は終了しましたが、いくつかの研究・活動は継続しています。竹内謙教授を中心にホタテ貝殻の研究、中井泉研究室を中心にホタテ貝体内のカドミウムの蓄積部位の特定研究、友岡研究室の中島忠章助教を中心にホタテ細胞の研究等です。また社会科学グループの活動として開催された理科・科学実験教室（小中学生、地域住民を対象）は村上学准教授を中心にその後も継続しています。町の方から「理科大という敷居が高くて……」と以前耳にしたことがありましたが、本部門の活動を通じて少しは敷居は低くなったと思います。

部門発足当初は研究テーマとして掲げていませんでしたが、途中から大きなテーマとして「毛蟹の養殖研



写真1 長万部町の2016年7月に開催された毛蟹祭り
多くの町民や観光客でにぎわう。周囲には多くの出店。



写真2 理科大生と北大生によるソーラン踊り
メインイベントは“毛蟹の早食い競争”だが、
その前後に催される企画の一つ。

究」が浮上してきました。その経緯を簡単に紹介しましょう。

昔、長万部町というと「毛蟹」が有名でした。現在は“かにめし弁当”を販売している駅前の商店は、当時、噴火湾でたくさん採れる毛蟹を茹でて「国鉄長万部駅」で販売したそうです。それを買って求めて、列車内で新聞紙を広げて食べたという教員が本学にもいました。その蟹が嘘のように採れなくなって、その代わりに「蟹飯弁当」を売り出したそうです。おそらく乱獲により激減したと思われる、その後は僅かな期間を除いて禁漁となり、噴火湾沿岸の住民はその復活を期待しています。

長万部町では、その僅かな期間に捕獲された雄の毛蟹を活用して、毎年“毛蟹祭り”が開催されています。このイベントは毎年初夏に開催され、長万部町民にとってはもちろんですが、遠方（中四国）からも参加者があるそうです（写真1）。基礎工学部の寮生も北海道大学の学生とともに参加し（写真2）、寮生はその運営にも協力しているそうです。

これもまた昔の話になりますが、かつて本学が「蟹の養殖研究」を行っていたことをご存知でしょうか？ 本学には総合研究所（現在の総合研究機構の前身で、今の生命医科学研究所の所在地）があり、故・橋高二郎教授は、その「根室海洋生物研究施設」でハナサキ蟹養殖研究を行いました。彼の優れた研究業績は退職とともに忘れられてしまいました。施設（写真3）はその後根室市に返還され、そのお弟子さんの一人が根室市職員となり、研究に改良を重ね、高い孵化養殖を実現し、稚蟹生産を可能にしました。施設の内部は、橋高二郎教授が研究した当時とほぼそのままで現在も使用されているそうです（写真4）。

このような経緯で、かつての部門員、長万



写真3 根室市の納沙布岬の手前に位置する「根室市水産研究所」の全景

かつての東京理科大学根室海洋生物研究施設。初夏の霧に包まれていた。



写真4 同研究所内に設置された多数の水槽
花咲蟹の稚蟹やエビ等の養殖研究が行われている。
手前の水槽間で故・橋高二郎教授が滑って転んだとか。

部キャンパスの竹内謙教授が中心となり「毛蟹養殖研究」が始まりました。長万部町はもちろん、北海道庁の期待も熱く、これからの進展が楽しみです。詳細は竹内謙教授の稿をお読み下さい。

先進諸国のなかでもいち早く我が国は“少子高齢化社会”を迎え、同時に地方の過疎化が進行しています。特に北海道は、札幌市を除くすべての地方自治体がこれらの問題に直面しています。本学の建学精神“理学の普及を以て国運発展の基礎とする”が、まさに北海道の長万部キャンパスで発揮され、社会の期待に応えることが期待されているような気がします。「長万部地域社会研究部門」のような新たな部門が組織され、社会から愛され、尊敬される活動が期待されます。